

気骨のある、変に気取ったり安い妥協のない、任せたら最後は自ら責任をとる。一徹無垢、高潔な人格を感じる河合富雄校長は、そのような学校長でした。

現在も活躍中の二期会という国内唯一のオペラ合唱団に関係する人に、偶然親交を得るチャンスに恵まれ、それが機縁になって、指揮者、作曲家である服部正先生にお世話になることとなりました。“信楽ってどんな風景か……信楽焼は？お茶は？紫香楽宮跡は？などなど四季の風景にいたるまで何度も詳しく尋ねられました。

手紙で、電話で、何回も東京の代々木にある服部先生のスタジオにへもお邪魔しました。

作曲家（芸術家）は、単なる物知りとか技術家ではないと強く感じました。ものの見方、考え方、感じ方の深さと鋭さ……研ぎ澄まされた鋭い感性と人格……当時の感動今も尚、鮮明。軟らかいストリング（弦）の響き、中低音の巧みな動きと軽い快いハーモニー。短いフレーズに凝縮された紫香楽の心を雰囲気高らかに謳い上げられた、これは名曲だ、と今尚新鮮な感動を覚えるところです。

続いて、校歌制定を記念して、第1回の文化祭が昭和26年3月15日に開催されたのです。ちなみに付言しておきます。

信楽町町歌も服部先生の作品です。作曲料が校歌並の当時1万円しかいただけませんでした。先生は、“作曲料とは言えない。これは君にあげる。そういうことにしておこう。”というわけで、当時大変申し訳なく思い、今でも忘れられません。もっともっと裏話はありますが、紙面がないので止めます。



この写真は、校歌制定を記念して河合校長の鶴の一声で、楽譜の印刷とレコードの作成となりました。〔制作は昭和27年12月16日〕誰に、どの範囲に配布されたのかは記憶ありません。校歌に残る証人は、このレコード1枚です。

蛇足を一つ。

当時の昼食は家に食べに帰ったものです。ある秋のいい天気の日、5時間目始まりのリン（手でもって振って歩くやつです）が鳴らされても教室の人数が足りません。定足数に達していません。室内に座っている生徒は何か目配せしているだけです。突然

どかどかと4、5人の生徒が教室に飛び込んできました。

5時間目が始まっていることも、教師がいることもおかまいなし、ただ夢中になっていたことの楽しい余韻だけをひっさげているのです。ヒョコンと突っ立っている。ズボンや上衣のポケットは異様に膨れています。僅かにのぞいているのは、見事な松茸でした。どの子もそうでした。

当時の愛宕山は松茸がたくさん出たのです。彼らは、松茸だけを盗んだのではなく、授業時もついでに盗んだのです。そしてまた、彼らはもっと多くのものを盗んだのです。

友だちや先生や親のいいところをです。さて、松茸がどうなったか、それについて教師は何を言ったか、その後のことは全て記憶にございません。